



なることだ。

ひ と は いえ                      ひ と は                      ちやうど                      ねんまえう                      だいまえ  
妃斗葉の家には、妃斗葉よりも 丁度200年前生まれの、7、8代前  
じよせい    せんぞ    か    のこ                      い                      しょもつ    だいだいう    つ  
の女性の先祖が書き遺したと言われる書物が代々受け継がれてい  
ないよう                      だいまえ    せんぞ    しそん    たく    ゆめ                      なん    どうじ  
る。内容は7、8代前の先祖が子孫に託した夢である。何でも当時  
う    ちゅうせんかん                      なに                      で    く    くうそう    さんぶつ  
は宇宙戦艦というのはS F アニメか何かに出て来る空想の産物  
の    こ                      ゆめ                      しょもつ    か                      じだい  
で、それに乗り込むのが夢だったらしい。その書物が書かれた時代  
やく    ねん    つきひ    なが                      う    ちゅうせんかん    げんじつ                      すがた  
から約200年の月日が流れ、宇宙戦艦は現実のものとして姿を  
あらわ  
現した。

ひ と は                      はは                      う    つ                      しょもつ    こ                      たち    まえ                      かく  
妃斗葉の母は受け継がれてきた書物を子ども達の前から隠した。  
しそん    ゆめ    たく                      だいまえ    せんぞ                      わる                      じぶん    こ  
子孫に夢を託してくれた7、8代前の先祖には悪いが、自分の子ども  
たち    きけん    め    あ                      ひ と は                      あこが  
達には危険な目に遭わせたくない。だが妃斗葉は憧れてしまっ  
だいまえ    せんぞ    しそん    たく    ゆめ    じぶん    かな  
ていた。7、8代前の先祖が子孫に託した夢を自分が叶えるという  
やく    ねん    とき    こ                      ふたた    つづ                      はじ    ものがたり  
ことに。約200年もの時を超えて再び綴られ始める物語に。

ひるやす                      こうしゃ                      おくじょう                      あ                      う    ちゅうせんかん                      ぞうせんしょ                      ちい                      み  
昼休みに校舎の屋上に上がる。宇宙戦艦の造船所が小さく見  
ぶあつ    かべ    かこ                      ふね    つく  
える。分厚い壁で囲われていて、どのような船が造られているの  
わか                      あこが                      じゅうぶん                      め    と  
かは判らない。けれど懂れるにはそれで充分。そっと目を閉じ  
みらい    じぶん    おも    えが  
未来の自分を思い描く。

ひ と は                      りょうしん                      みやじまちゅうぐんせい    か    だいがく                      しんがく                      わね    はな  
妃斗葉は両親に宮島宇宙軍製菓大学に進学したい旨を話した。  
う    ちゅうぐん    はい                      おも  
「ひいちゃん。まさか宇宙軍に入ろうなんて思っ  
てないでしょう  
ね」母は少しきつい口調で念押しする。  
しよくひんかんけい    し    ごと                      わたし  
「パパもおじいちゃんも食品関係の仕事だから、私も……っ  
おも  
て……」

「そうだな。食べ物の仕事に就けば食いつぱぐれも無いだろうしな」

言いそびれてしまった。本当の目的は宇宙戦艦に乗るためだということ。製菓を学ぶのはその手段の一つでしかないことを。言えなかった。

宮島宙軍製菓大学はその名の通り広島県廿日市市の宮島口にキャンパスを構える、菓子職人を育てる為の単科大学である。宮島口は世界遺産厳島神社の在る宮島へと繋がる観光名所の一つであり、何世紀も昔から「もみじ饅頭」をはじめとする銘菓の製造が盛んである。

宮島口と宮島とを繋いでいる海、大野瀬戸に宇宙戦艦の造船所がある。宮島宙軍製菓大学が宇宙軍の公立学校であるのはこういった環境からの必然なのだ。

宇宙環境下での仕事に携わる者達にとって食の問題は大切な事。栄養面だけを考えるのならば簡単な事なのだが、ヒトの体というのはそれほど単純には出来ていない。ただ栄養素を体に取り込めばいいのではない。美味しい、楽しい、といった前向きな感情と共に摂取しなければ、結果として健全な心身を保つ事は出来ない。

宮島宙軍製菓大学では、宇宙環境下、特に宇宙戦艦に乗務する者達を、菓子やデザートといった嗜好品を通じて支える事を専門とする人材の育成を主な目的としている。妃斗葉の母親が、妃斗葉が宇宙軍に入ろうとしているのではないかと心配してい

たのは、そんなところからだった。

もちろん、みやじまちゅうぐんせい か だいがく 宮島 宙 軍製菓大学を出たからと言って、い ぜんいん 全員が  
う ちゅうぐん 宙 軍での しよく つ わけ 職に就ける訳ではない。宙 軍戦艦の う ちゅうせんかん 厨房での仕事  
う ちゅうちょうりし のほとんどは宙 軍調理師が行う。宙 軍調理師の中には菓子や  
せいつう デザートにも精通している者が少ない。宙 軍製菓衛生師にと  
う ちゅうせんかん って、宙 軍戦艦の ちゅうぼう 厨房は狭き門なのである。そのため、おお 多くの  
う ちゅうせい か えいせいし 宙 軍製菓衛生師は地上の一般の製菓会社や菓子店に就 職する。  
えん うん 縁と運があれば国際宙 軍ステーションや宙 軍ホテルの う ちゅう 厨房に  
しゅうしよく き 就 職を決める者も居た。

ひ と は 妃斗葉には おきな 幼い頃からの ころ 夢があった。宙 軍開発に ゆめ 技術者として  
たずさ て携わるといふ ゆめ 夢。だから しょう 小、ちゅうがくせい 中学生の頃は ころ 理科や数学の勉強  
がん ぼ を頑張った。成績は悪い時でも校内で じゅう 十本の指に入るほどだった。  
ははおや だから、母親から代々伝わる だいだいつた 書物の しょもつ 話を初めて聞いた日、はなし 技術者  
せんとうき か戦闘機乗りとして宙 軍戦艦に う ちゅうせんかん 乗りたいと思った。  
おも

こうこう しかし、高校に入学した頃から にゅうがく 事情は変わった。頑張っても思  
ころ うような成績が取れなくなった。上には じじょう 上が居ることを知った。  
せいせき 担任の水嶋先生は と 合格圏内の うえ 理工系大学への進学を勧めてくれた  
たんいん が、みずしませんせい それでは駄目だった。合格できるだけでは ごうかく 駄目なのだ。入学後  
だめ も ごうかく 上位の成績を保ち続け、だめ 確実に宙 軍戦艦での にゅうがく 職にたどり着か  
じょうい なければ意味が無いのだ。今まで せいせき 頑張って勉強してきた たも 理科や  
い み 数学が な 使えて、いま 確実に宙 軍戦艦での がん ぼ 職にたどり着け べんきょう そうな  
しんがくさき 進学先。妃斗葉にとって、ひ と は それが みやじまちゅうぐんせい か だいがく 宮島 宙 軍製菓大学だった。

ねんあき ひ と は みやじまちゅうぐんせい か だいがくせい か がくぶ う ちゅうせい か がっ か  
2190年秋。妃斗葉は宮島 宙 軍製菓大学製菓学部宇 宙 製菓学科  
すいせんわく じゅけん いっしゅうかん ご ごうかくつう ち う と やく ねん とき  
を推薦枠で受験。一 週 間後に合格通知を受け取った。約200 年の時  
こ ひとり じょせい みらい たく ゆめ つづ いま  
を超えて、一人の女性が未来に託した夢の続きが、今、ゆっくりと  
うご はじ  
動き始めた。